

1987
三加和町田中城跡調査概報(1)

田 中 城

(田中城跡本丸の調査)

—1987—

三加和町教育委員会



例 言

1. 本書は、熊本県玉名郡三加和町における昭和61年度埋蔵文化財調査の概報である。
2. 本調査は、昭和61年度における国庫補助事業として、三加和町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は、池田道也が担当した。
4. 本書に使用した図の作成は、池田道也・居石裕臣が行った。製図は、池田道也・杉村恵美が主に
行い、小林亜紀・坂本由美がこれを補助した。
5. 本書の編集は、池田道也が担当した。

調査組織

調査主体	三加和町
調査責任者	上原松柏（三加和町教育長）
調 査 員	田添夏喜（玉名市文化財保護委員長） 池田道也（菊水町教委学芸員）
調査指導	原口長之（熊本県文化財保護審議員） 田辺哲夫（玉名市史編集委員長） 白木原和美（熊本大学文学部教授） 北野 隆（熊本大学工学部教授） 桑原憲彰（熊本県教委文化課参事）
事 務 局	藤木住人（三加和町社教係長） 竹下康一（ 〃 〃 主事）

玉名郡三加和町田中城跡調査概報（1）

— 中世末の山城の調査 —



写真1 田中城跡全景

I 周囲の環境と調査経過

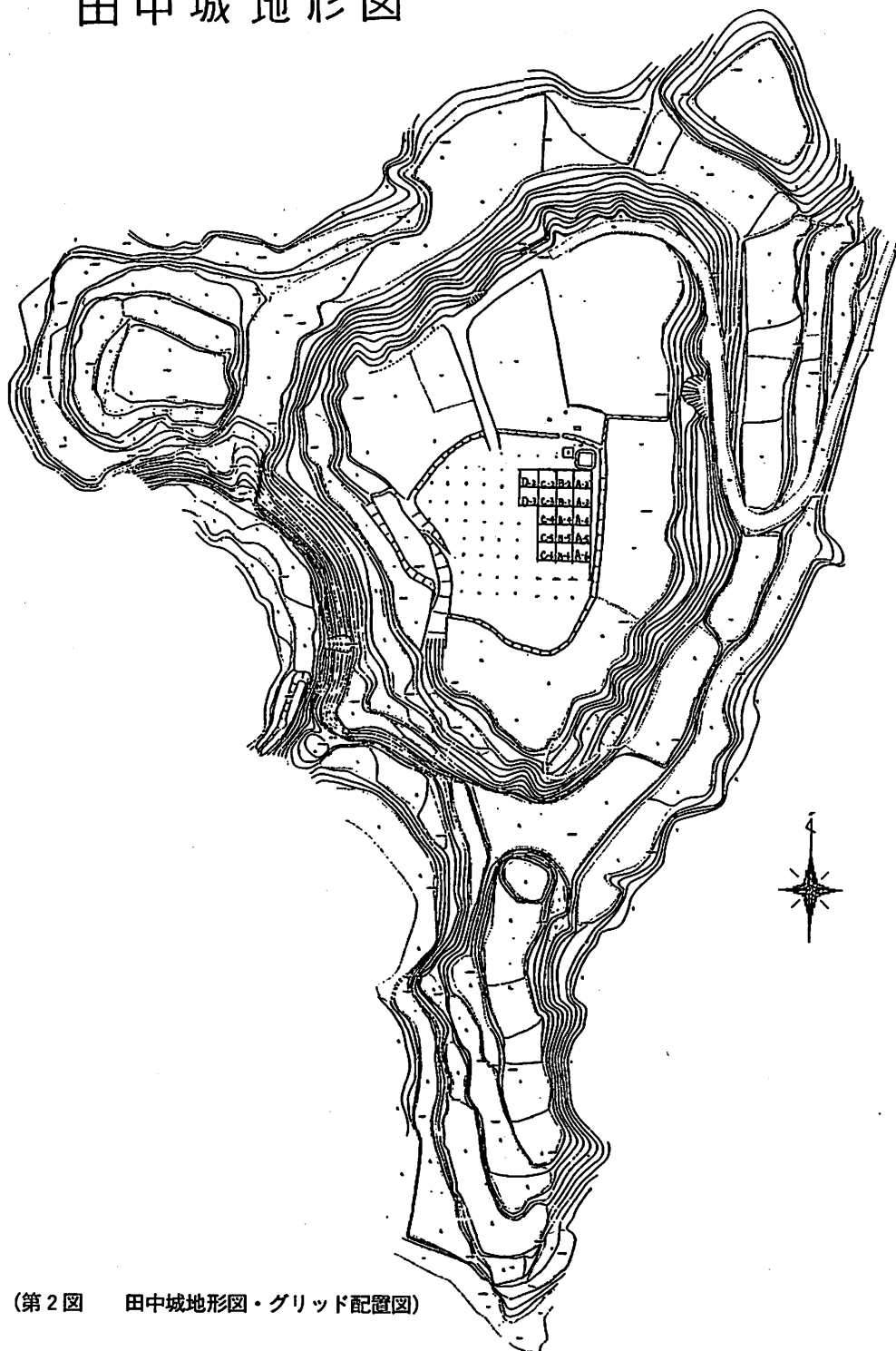
①周囲の環境

三加和町は、熊本県の北部に位置し、東は鹿本郡鹿北町及び山鹿市、南は玉名郡菊水町、西は玉名郡南関町及び福岡県山門郡山川町、北は八女郡立花町と隣接し、町のほぼ中央部を和仁川、十町川、岩村川が南流している。総面積59.46平方キロメートル、人口6394人の町である（三加和町町勢要覧'87より）。＜第1図参照＞

調査対象の田中城跡は、三加和町のやや西寄りを南流する和仁川東岸に位置する。田中城は、戦国時代末、肥後国人52人衆に数えられる和仁親実を城主とする一族の居城であった。天正15年(1587)、豊臣秀吉の征西後、国守佐々成政の大軍に2か月余も籠城抗戦したが、城内の謀反により12月6日（一説には13日）落城したという。現在、本丸、二の丸、三の丸、空堀等が残っており、中世から近世への過渡期の城跡として、貴重な遺跡である（三加和町文化財ガイドブック・昭和59年3月発行より）。

田中城は、凝灰岩を基盤とする台地の特殊な地形（第2図参照）を利用して造られている。そして、その南西に面した凝灰岩の崖面に、14基の横穴群があり、また西に面する岩壁には、7体の地藏尊の彫刻と文明3年（1471）3月の銘が残されているなど、古くからさまざまな形で住民生活と深いかかわりを保ち続けてきたことが推察される。

田中城地形図



(第2図 田中城地形図・グリッド配置図)

②調査経過

現地調査は8月1日に始まり、10月18日に終了した。その概要は次の通りである。

○8月1日～8月31日

幅約2mのトレンチを南北に設定し、表土剥ぎを行う。この時点で、おびただしい数量のピット群を検出。ただし、す



写真2 調査風景

べてのピットが田中城跡に関連するものかどうかは、この時点では不明。雨が少なく、乾燥した日が続く。表土を剥いだ後の表面が、堅く乾燥してヒビが入る。

○9月2日～9月4日

表土剥ぎ及び東側ピットの再検出を行う。ピットに規則性なし。

○9月5日

表土剥ぎを行った部分に、5×5mグリッド設定のための基準杭を設ける。表面の風化乾燥が著しいため、グリッドごとにピット再検出を行うことにする。

○9月9日～9月13日

5×5mのグリッドを38面設定。東西にA→G、南北に1→7のナンバーを付け、グリッドの区別をする。A列から調査を再開する。

○9月16日～10月2日

B列及びC列のピット再検出。ピットは、3種に大別できると判断。9月22日県文化財保護審議員の視察がある。中世のピットと考えられるものにも2種あると推定。大半は中世のピットと考えてよさそうである。



写真3 調査風景

○10月6日～10月18日

D例のグリッドを2面再検出する。A例～D例のピット掘りあげを行う。A-6からC-6のグリッドにかけて、空堀状の遺構を検出。さらに、A-4からB-4にかけても、やや浅いが同様の溝状遺構を検出。この期間に、実測・写真撮影を行い現場での発掘調査は終了。

以上が調査経過のあらましであるが、設定したグリッド38面のうち、実際に終了したのは、A-2～A-6、B-2～B-6、C-2～C-6、D-2～D-3グリッドの17面、広さにして425㎡であった。これは、予定の半分弱で、本丸の3分の1程の広さである。

II 遺構・遺物

①遺構 (第3図)

○ピット群

検出したピットは多数で、350個を超える。大きさは径20～30cmのものが大半を占め、相互間の関連を見きわめることが、きわめて困難であった。

ピットは、その内部の土色により、大まかに次の四種に分類できるが、大半はどちらとも判別がつけがたいものであった。

(A) 褐色土……………中世以前のもの。やや硬い土である。

(B) 暗褐色土……………中世のピットと考えられるもの。

(C) 極暗褐色土……………中世のピットと考えられるが、(B)との切合い関係で(B)より新しいと思われるもの。

(D) 暗褐色土……………(B)とも(C)とも区別がつけ難いもの。

量的には、(D)が最も多く(C)→(B)→(A)の順に少なくなる。遺構実測図を見ればわかるように、直線的なつながりが感じられるのは、グリッドB-4・5、C-5の一部にすぎず、現時点でピット群の配列による構築物の配置を読み取ることはねきわめて困難といわざるをえない。

○溝状(空堀状)遺構

ほぼ東西に並行して設けられた2つの溝状遺構を検出した。北側にあるほうを1号遺構とし、もうひとつを2号遺構と呼ぶことにする。

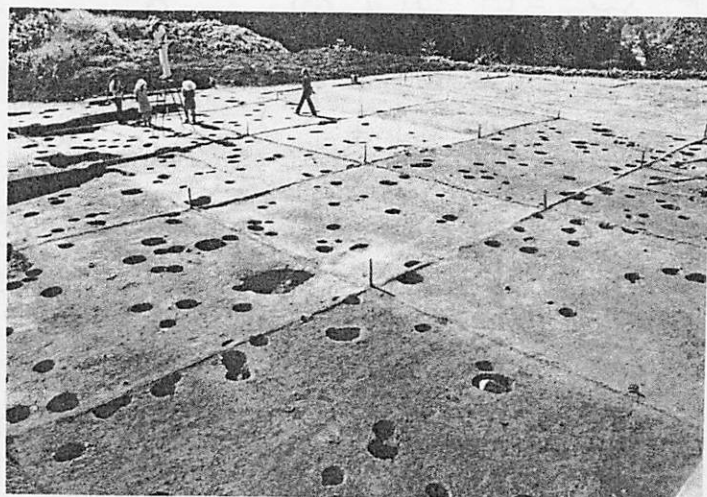
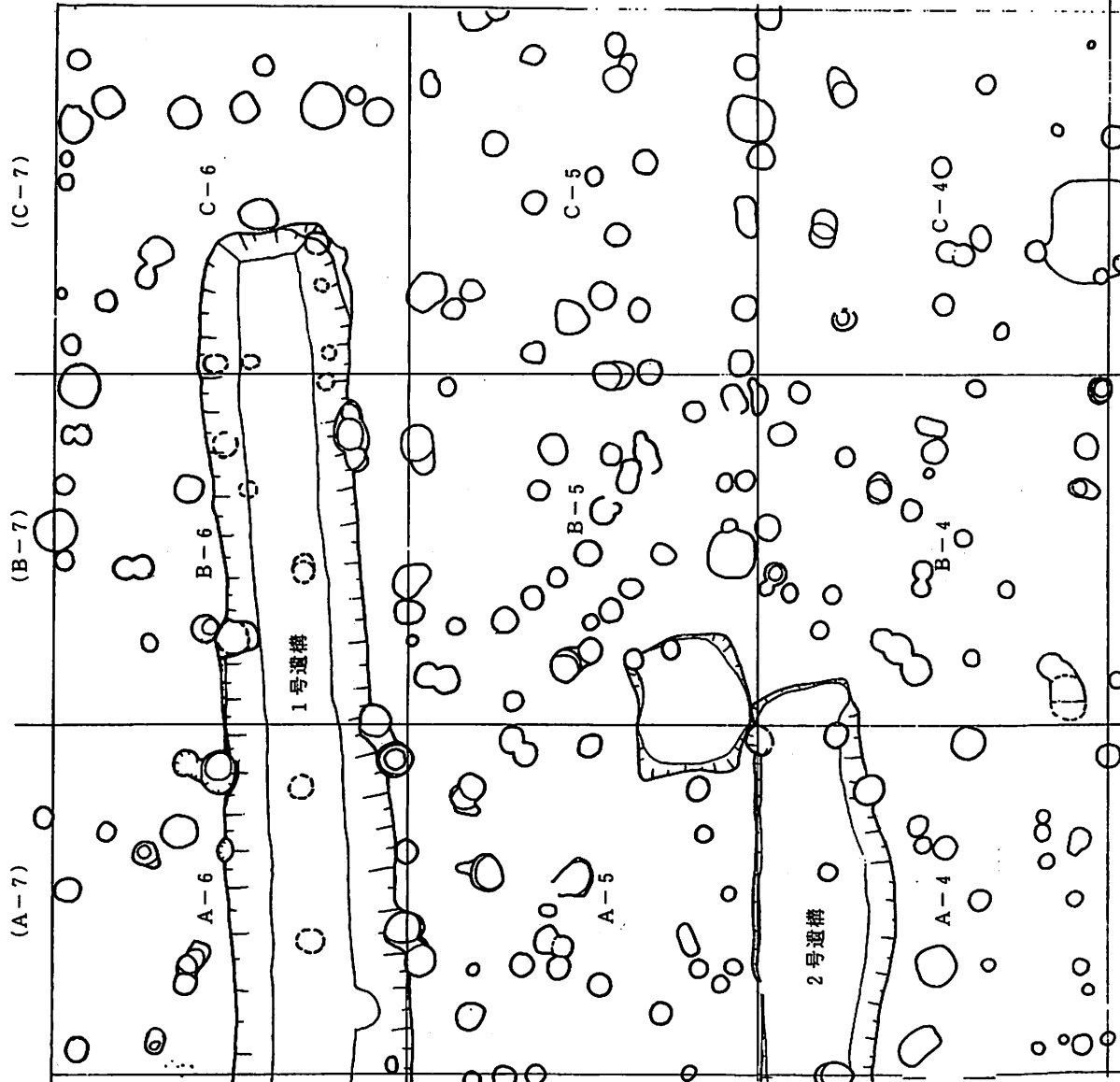
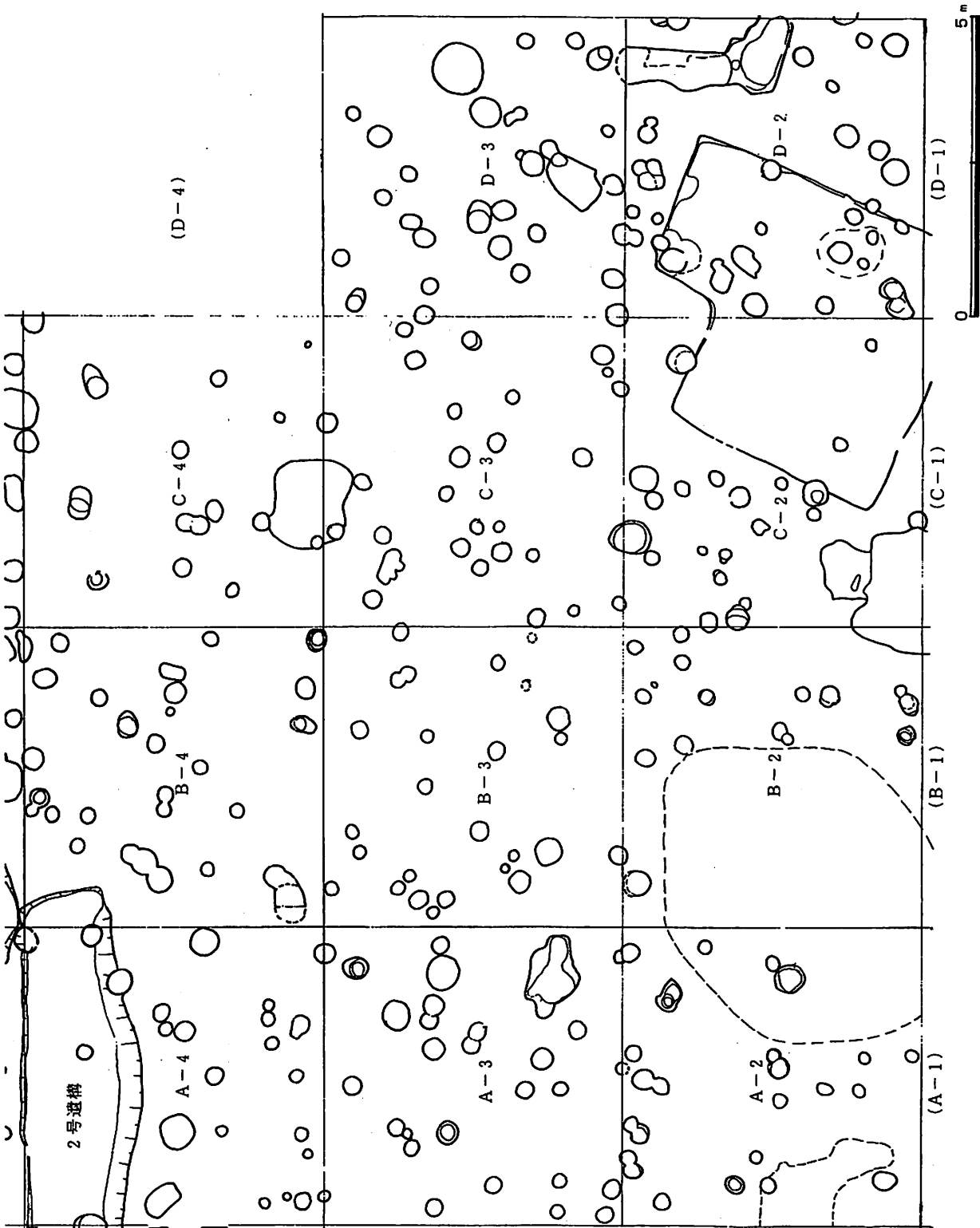


写真4 ピット群出土状況



(D-4)



(第3図 遺構実測図) ※番号はグリッド番号

＜1号遺構＞

西端は、グリッド設定の都合上、検出していないが、そのまま一段下の畑地まで切り通しているとは推定される。東端はグリッドC-6で途切れている。検出部分の全長は11.48mで、幅約2m、深さ約1mを計る。壁はかなり急な立ち上がりで、

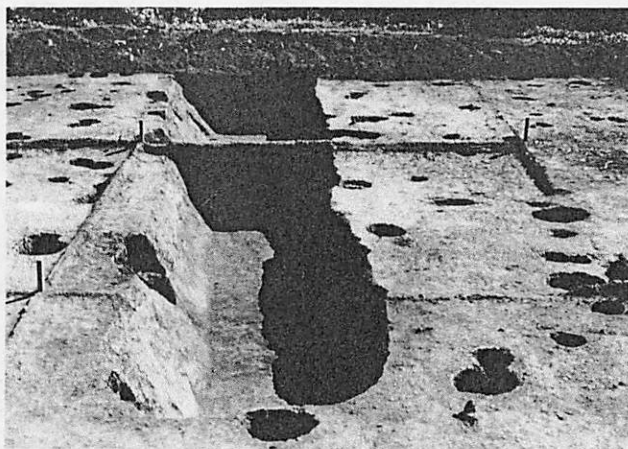


写真5 1号遺構検出状況

きわめて平坦な仕上げを施し、底面も壁面同様に平坦である。ごくわずかではあるが、東から西へ傾斜しており、その比高差は約10cmである。これらの形状から、1号遺構の機能を考えると、空堀あるいは塹壕として設けられたものと推定できる。

1号遺構の時期は、ピットB群と同時期のものと考えられ、この1号遺構が埋めもどされた後、新たにピットが掘られている。埋めもどした後に掘られたピットはC群に属するものである。なお、この1号遺構をピットB群と考えた根拠として、遺構内部に落ち込んだ土がB群ときわめて近いこと、中世の遺物を伴うこと、また、短時間で一気に埋めもどした根拠が認められ、その直後に設けられたピットC群との前後関係が、ピット間の切合い関係と一致することなどがあげられる。

＜2号遺構＞

1号遺構と同様、西端は検出していないが、これも一段下の畑地まで切り通しになっていると思われる。東西の長さ5.61m、幅約2m、深さ約0.5mで、壁面、底面ともにやや凹凸が認められる。底面は、東から西へ傾斜しており、その比高差は26cmである。また底面までの深さは、1号遺構に



写真6 2号遺構検出状況

比べて浅く、底面も傾斜があり、段下の畑地から本丸への一時的な通路として設けられた可能性もある。

②遺物（第4図）

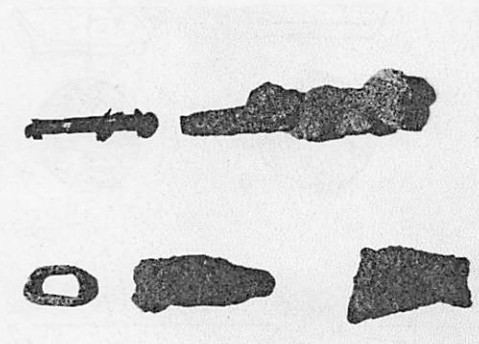
出土した遺物には次のようなものがある。

○金具類（写真7）

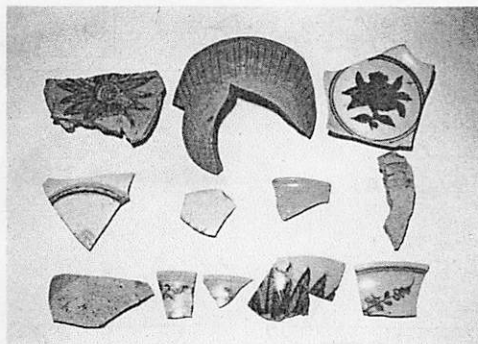
明らかに用途のわかるものはなかったが、鉄製品・銅製品など数点出土した。

○食器類（写真8）

青磁皿や白磁皿、染付の鉢、碗、皿のなど小片ではあったが多数出土した。



▲ 写真7 金具類



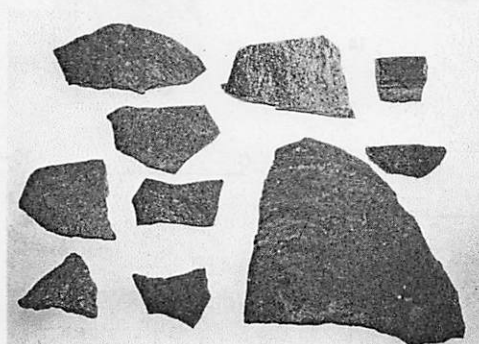
▲ 写真8 食器類

○調理具類（写真9・10）

すり鉢や石鍋などが出土した。点数は少ないが、すり鉢を1点復元できた。また石鍋は、小片であったが、滑石製で外面にススが付着しており、その用途は明らかである。他に、石臼と思われる破片なども出土した。

○貯蔵具類（写真11）

甕や壺の破片が出土したが、復元可能なものはなかった。

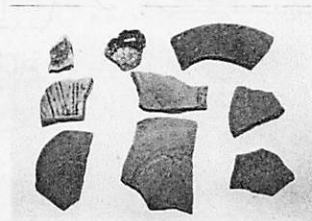


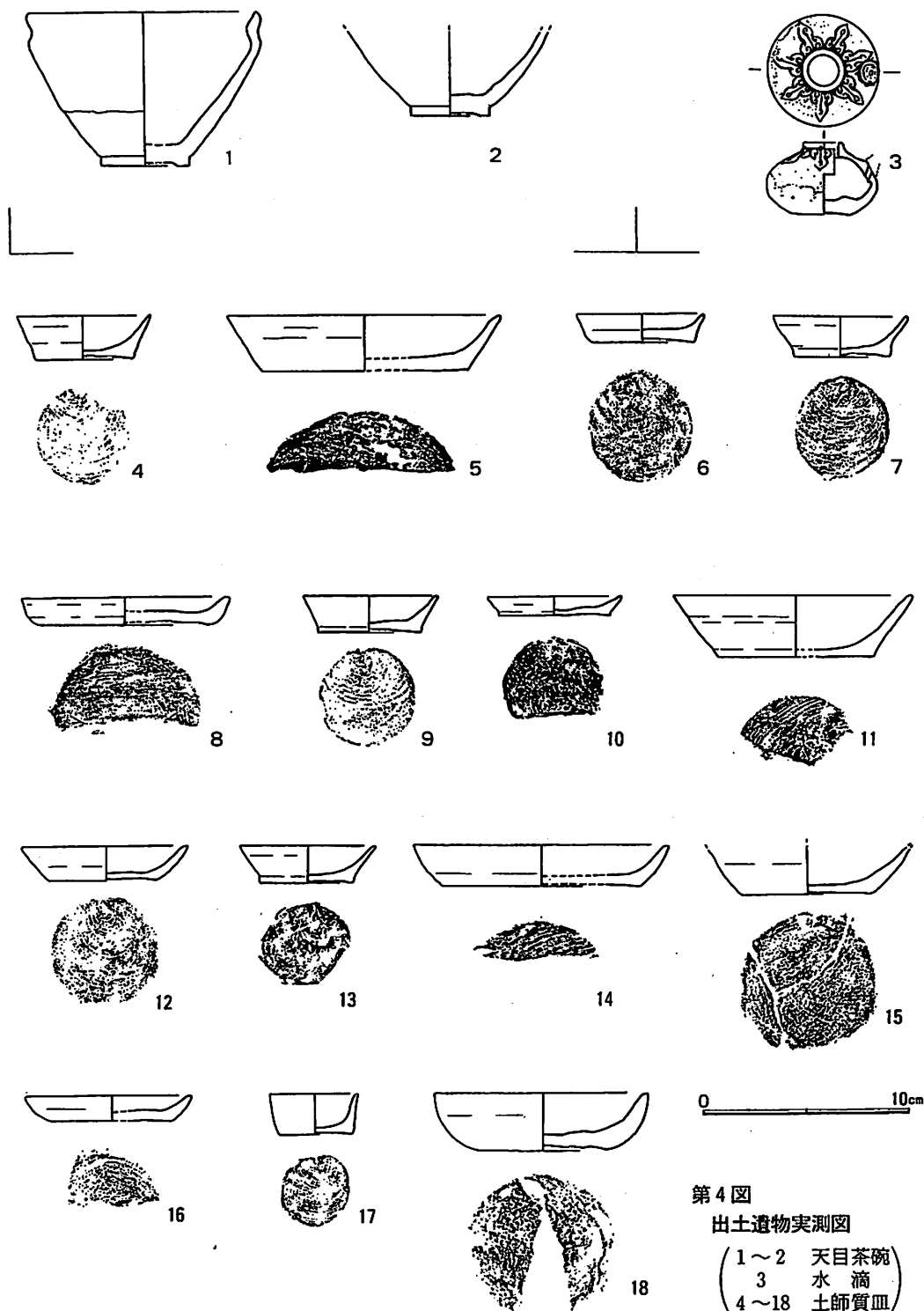
▲ 写真11 貯蔵具類



写真9 ▲
すり鉢

写真10 ▶
(石 鍋
すり鉢片)





第4図

出土遺物実測図

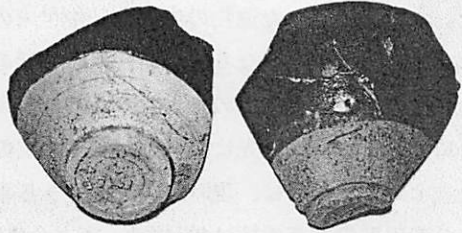
(1~2 天目茶碗
3 水滴
4~18 土師質皿)

○茶器（写真12）

天目茶碗 2 点と茶壺と思われる小片が出土した。また、茶臼の一部が本丸上から採集されている。

○文具類（写真13）

注口形の陶器製の水滴が一点だけ出土した。



▲ 写真12 天目茶碗

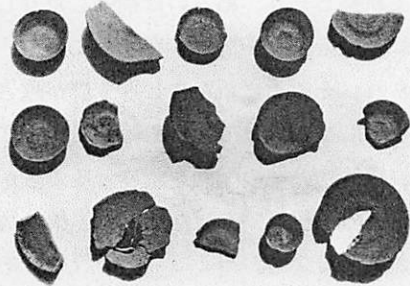
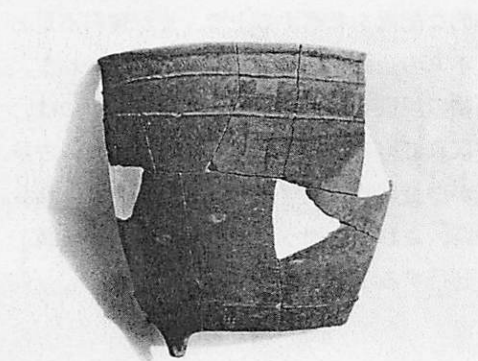
◀ 写真13 水 滴

○日用雑器類（写真14）

多用途に利用されるものとして、土師質の皿がある。大きさは、底径 5～13cmのものが出土した。これらの用途として、灯明皿、食器、中には、ピット中から出土したものも含まれており地鎮のために使われたものと推定される。いわゆる祭祀用具として使用された例で、類似例は多い。

○暖房具類（写真15）

瓦質の火舎が出土した。数種類出土したが 1 点を除いて、ほとんどが復元不可能な小片であった。遺存部分の多い 1 点の火舎から推定すると、脚は 3 個である。



▲ 写真14 土師質皿

◀ 写真15 瓦質火舎

〔遺構・遺物の項では、熊本県文化課参事
桑原憲彰氏からさまざまな御教示を賜わ
りました。〕

III ま と め

田中城の調査は、昭和59年の試掘に続き2度目である。昭和59年の試掘の際に、遺構までの深さや遺物の年代などが確認された。それによると、現在の表土（耕作土）の下に、ピットを主体とする遺構があり、桑の根などによる攪乱を被った部分もかなりあることが判明した。また、出土した遺物の中には、中世末の陶磁器に混じり、石鏃や弥生式土器なども含まれており、当地がかなり古い時代から生活の場として利用されていたことが明らかになった。

今回の調査は、以上のような調査結果をふまえてのもので、本丸上の構築物を確認することにあつた。結果を先に述べれば、本丸上の構築物の規模や配置を確認するには至らなかった。そこで本項では、現時点で把握できる事項と今後の課題を次に提起しまとめとする。

○本年度の調査面積は425mで、本丸全体から見れば、およそ3分の1程度の広さである。

○遺構の大半は、径20～30cmほどのピットで、調査部分だけでも350個を超える。

○ピット相互間の配列は、確定できない。

○ピットは、大まかに四種に分類できる。

○2つの溝状（空堀状）遺構が検出された。（詳細はII-①遺構の項を参照のこと。）

○年代の手がかりとして、多数の中世の遺物の他、各時代の遺物が出土した。（詳細はII-②遺物の項を参照のこと。）

以上の事柄から、本丸上の構築物は、複数存在し、一戸の規模はかなり小さいものと推定される。また、その特殊な地形を人類が生活の場（あるいは活動の場）として利用しはじめたのは縄文時代に遡る。そして、中世に入り恒常的利用の住居でなく、非常の際の建物が構築され、いよいよ緊迫した事態（天正15年の戦乱）がせまりつつあるとき、ある部分はとり壊して新築したり、あるいは補強したりしたものと推定される。その根拠として、数種類の異常に多くのピット群が存在することや、塹壕の目的で造られたとしか考えられない空堀が埋められ、その上に新たにピット群が残されていることなどをあげることができる。短期間のうちの度重なる建て替えや補強によって、おびただしい数のピットが残され、その結果として、構築物の柱の配列を読みとることが困難となっている。また、今回の調査が本丸全体の約3分の1程度であつたことも、構築物の全体的な配置を考察する上で、まだ資料不足と言わざるを得ない。そこで今後の課題であるが、本丸の全面発掘がまず第1にあげられる。これは、何度も述べているように、未解決の構築物の規模と配置を明らかにするためには、是非とも必要である。次に、二の丸・三の丸と呼ばれている箇所調査、さらに曲輪、古井戸の調査など、田中城を究明するためには、慎重かつ長期的な展望に立った調査が望まれる。

〔 本稿は、概報でありいろいろ不備な面が多い。これらを補うために、田中城跡の調査が完了した時点で全体を総括した報告書を刊行する予定である。 〕

文
化
課

No. 10591

済

A-34

